

小学校における読書活動の推進

Reading Activity at the Primary School

原田 祐之*

伊東 英**

HARADA Masayuki ITOH Suguru

はじめに

小学校の生徒の様子を見ていて気がつくことのひとつに、生徒たちがじっくりと本を読む機会が本当に少ないという事実がある。特に図書館の利用状況や、貸出冊数を意識して調査していたわけではないが、授業以外の時間に子供たちがゆっくり本を読んでいる姿はまず見かけられない。国語の授業では、本読みがとてまたどたどしい生徒が多い。

この「読まない、読めない」現象は、特に男子に多く現れているように感じる。女子に関して言えば、貸出冊数は決して多くはないものの、個人差はあまり見られないのだが、男子の貸出冊数を見ると、着々と読んで冊数を増やしている生徒がいる一方、普段から読書の姿が見られない生徒たちについては、一冊も借りたことがない、図書館にも足を運んだこともない、という極端な様子もうかがえる。

このような事態を前にして、ここでは、「読書に親しみ、自ら進んで本を選び、読んでいける子どもたち」の育成について考察し、実態調査と読書の実践を報告したい。この論文は3章から構成され、第1章には、「学校読書調査」をもとに全国の小中高校生の読書量の実態をまとめ、また、OECDが行っている「生徒の学習到達度調査」(PISA)の結果をもとに15歳児の読書傾向についてまとめた。そこで、全国の小中高校生の読書量は、学年が上がるにつれて下がってきている傾向にあること、そして、ここ数年読書量が増加しているといわれている小学生の中でも前年度の統計に比べ読書量が減少している学年があることなどが見えてきた。また、1か月に1冊も本を読まない不読者の数も多く、問題が指摘されていることがわかった。さらに、日本の15歳児が自発的に読書を行うことが非常に少ないということがわかった。そして、総合読解力の診断結果も前年調査に比べ点数も順位も落とし、その上、低位と上位の生徒の割合がそれぞれ高いという学力の二極化が生まれていることが見えてきた。

第2章では、読書活動の意義についてまとめた。資料によると、前回調査に比べ、日本語力の低下を感じている割合が一番伸びているのが10代後半の若者であり、その原因として活字離れを挙げている人の割合も高いことがわかった。そこで読書活動がもたらす効果を調べたところ、現在の学校教育の中で最も効果的に読書活動を行っていけるのは、「朝の読書」活動であるという判断に至った。

第3章では、原田の勤務校にて実際に朝の読書(以後、朝読書とする)活動を行った実践をまとめた。自分の担当する六年生を対象に行った様子をまとめてみた。朝読書の効果を計る場合、点数化してその効果を見ることは困難であるため、子どもたちに定期的にアンケートを実施して、その意識の変容を探った。スタートしてからすぐに子どもたちの読書に対する意識は高くなり、読書量の増加した。さらに、読解力の向上など直接的な効果以外の波及効果も見られるようになってきた。しかし、朝読書が学校全体のカリキュラムに定着してないことによる各クラスの意識のばらつきも見られ、学校のカリキュラムの一部として朝読書が位置付くことと、そのための教師の姿勢や意識を共通認識して徹底させていくことの必要性が見えてきた。

* 高山市立山王小学校

**岐阜大学教育学部生涯教育講座

1. 小・中・高校生の読書量の実態

1. 1. 学校読書調査

1. 1. 1. 読書量の変化

全国学校図書館協議会と毎日新聞社が小（4年生以上）・中・高校生を対象に共同で行っている「学校読書調査」では、毎年5月の1か月間の平均読書冊数（教科書、参考書、マンガ、雑誌を除く）が出されている。

この調査によると、2003年5月の1か月間の平均読書冊数は小学生8.0冊・中学生2.8冊・高校生1.3冊であった。前年度の2002年度調査では、小学生7.5冊・中学生2.5冊・高校生1.5冊であったので、小学生・中学生で増加の傾向を示したことになり、小学生で0.5冊増えて8冊台に乗ったのは、49回の調査で初めてである。

しかし、内訳を細かく見ると、4年生の平均冊数が11.3冊で、前年より1.6冊増と大きく全体を押し上げている。5年生は0.1冊増、逆に6年生は0.5冊減だった。男女別に比較すると、4年生の男子が1.5冊増えて、9.7冊に、女子も1.8冊増えて13.0冊になった。しかし、5年生の男子はわずか0.5冊増の6.2冊にとどまり、女子になると逆に0.3冊減の8.3冊になった。6年生になると、男子の0.6冊減の4.7冊、女子の0.5冊減6.0冊と男女とも減少傾向を見せた。

(小学校の内訳)

学年	性別	2002年度との比較(冊)		今年度の結果(冊)	学年別平均(冊)
4年生	男子	+1.5	+1.6	9.7	11.3
	女子	+1.8		13.0	
5年生	男子	+0.5	+0.1	6.2	7.2
	女子	-0.3		8.3	
6年生	男子	-0.6	-0.5	4.7	5.3
	女子	-0.5		6.0	

中学生は2年生女子が0.9冊増えて3.7冊になったのを除けば、あとの各学年・男女とも0.1～0.4冊増で、全体では0.3冊増の2.8冊となった。

高校生は特に2年生男子が著しい減少傾向を見せ、0.7冊減の0.9冊になったのを始め、1年生の男女が減少、3年生女子のみが0.2冊増の1.6冊となった結果、全体で0.2冊減の1.3冊だった。

この結果を見ても、子どもたちの読書量は学年が上がるにつれて低下していることは明確である。4年生が5年生になるだけで、1か月に読む書籍の冊数がおよそ4冊も減り、それ以降も学年が一つ上がるたびにおよそ2冊ずつ減っているのである。これは明らかに「学年が上がるほど本を読まなくなる」という「読書離れ」が進んでいると言えるだろう。

一方で、過去35回行われた1か月間の平均読書冊数のデータで小学生の推移を見ると、何度かの減少時期があるものの、全体的には増加の傾向を示している。中学生では、2000年度まではずっと横ばい傾向を見せていたが、2000年以降、わずかずつではあるが確実に上昇している。2004年度の結果は、小・中学校ともデータとしては過去最高の数字が出ている。一方、高校生については、現在に至るまでほとんど変化がなく低迷を続けている。高校生の場合、男子の読書量は例年1.1冊を中心に動かず

に、女子の読書量の増減が毎年のわずかな変動を招いているようである。

この増加の傾向の背景には、昨年に引き続く『ハリー・ポッター』人気や国をあげての読書活動の推進、「朝の読書」の普及などが考えられる。

1. 1. 2. 不読者の傾向

また、「学校読書調査」には、「不読者」の傾向に関する大変興味深いアンケート結果もある。「不読者」とは、「一か月の間に本を1冊も読まなかった児童生徒」のことを指す。この不読者が2003年度の調査では、小学生で前回よりも0.4ポイント増の9.3%になっているのである。高校生も2.7%増で58.7%。これを細かく見ると、高校1年の8.3ポイント増、高校2年でも3.8ポイント増という大幅増が見られる。不読者の率は高校生になってから一気に増えていることになる。ちなみに、中学生は0.9ポイント減になり31.9%だった。

このような「不読者」と言われる小・中・高校生が「なぜ、本を読まないのか」、その理由について調査した結果によると、「読みたいと思わなかった」が、小学生では57%、中学生では69%、高校生では67%となっており、「読みたかったが読めなかった」の小学生42%、中学生30%、高校生32%をはるかに上回っている。91年の調査に比べると、小・中・高校生の不読の原因が「読みたいと思わなかった」に重点がおかれるようになってきているのが分かる。

さらには、「本を読みたいと思わなかった理由」という質問に対しては、「他にしたいことがあったから」では小学生が51%でトップであり、高校生は38%と少ない。しかし、「ふだんから本を読まないから」では高校生が54%でトップであり、小学生は40%と少ない。ここで小学生と高校生で傾向が逆転しているのが分かる。中学生についてはどちらの項目も49%と同じ数字だった。これを見ると、小学生は他にしたいことがたくさんあって読書から離れていく傾向があるが、高校生になるにつれてもともとの読書の習慣がなかったことが読書から離れていく理由になってきている。さらには、「読む必要を感じなかった」が小学生18%に比べ、中学生28%、高校生24%という数字を見ても、中高校生がいかにか本とは縁のない生活をしているかがうかがえる。

1. 2. 小学校高学年から中学生にかけての不読者増加の要因

1. 2. 1. 外的要因

前節で述べた不読者の傾向は、「学年が上がると不読者が増加する」というものであった。学年が上がると本を読まなくなるという現象の原因は、毎日の勉強が難しくなることに加え、部活動やスポーツ少年団、塾や習い事などでの活動が入ってきて、ゆっくりと本を読む時間を確保することが次第に困難になってくること、そして何より、インターネットや携帯電話、テレビゲームの普及など様々なメディアの発達により、子どもを取り巻く生活環境が大きく変化してきたことなどが挙げられる。子どもたちが「読みたくても読めなかった」と答える要因がここにあるであろう。

読書時間の確保の難しさは、中学生の1日の生活パターンを考えてみても分かる。朝は8時までに登校、しかも、部活動の朝練習などがある場合は、もっと早く、7時半くらいに登校しなくてはならない。放課後は部活動がある。飛騨地方は岐阜の方に比べ、部活動が盛んに行われている方だということを知ったことがあるが、夏期の部活動は、ほぼ毎日6時半くらいまでみっちり行われる。冬期のわずかな期間は日も短く、5時前の下校となるが、生徒が家に帰ることができるのは、遅い時間であることが分かる。そこから、さらに塾に行く生徒も多く、そういう時は9時ころの帰宅になるそうである。帰ってくれば、明日の宿題をやらなければいけない。空いた時間に夕食、風呂などをすませ

でも、寝るまでの間に時間を生み出すのはたしかに困難なことかもしれない。その現状は小学生高学年でも同じことが言えるようで、昨年担任していた6年生のクラスでも、なんらかのスポーツ少年団に所属している子どもは学級の3分の1以上である。その子どもたちの土日の生活のほとんどが、練習や大会、遠征などでつぶれているようである。その他、ピアノ、そろばん、エレクトーン、習字など習い事に通う子どもも多く、塾に行っている子どもを合わせるとほぼ100%に近い。

また、子どもたちのインターネットや携帯電話の利用の実態について、以下のような記事がある。

(社)日本PTA全国協議会は、昨年11月に小学5年生と中学2年生5,466人と、その保護者1万487人を対象に「青少年とインターネット等に関する意識調査」を実施した。それによると、自宅のパソコンがインターネット接続されているのは、小学生保護者で62.9%、中学生保護者で66.1%。子どもが携帯電話・PHSを持っているという小学生保護者は10.4%、中学生保護者は26.1%。また子どもについては、インターネットの利用が「ほとんど毎日」「時々」の合計は小5が58.7%、中2が65.2%だった。また小5では、利用目的がゲームということが「よくある」「時々ある」が多く、合計56.8%。中2では、ホームページの内容を見ることが「よくある」「時々ある」が多く、合計69.6%だった。

(教育家庭新聞ニュース、2003年8月30日号)

この実態を見ても、小・中学生のインターネット、携帯電話、テレビゲームの普及、利用はかなり高くなり、子どもたちは、毎日の生活の中でなんとか生み出しているわずかな自分の時間を、次々と現れる新しいメディアに囲まれて生活していることになる。

高学年になるにつれて子どもたちが本を読まなくなる現象を、こうしたかれらを取りまく環境面から考えたとき、その原因の一つがみえてくる。

1. 2. 2. 内的要因

もう一つの原因として考えられるのは、この時期に子どもたちが手に取る本の内容が変化してくることにあると言える。子どもたちが「読みたいと思わなかった」と答える要因もここにあるのではないかと考えられる。この問題に対して、齋藤は次のように述べている。

全国的な読書アンケートによれば、日本の小学生の読書量は目立って少なくない。しかし、それが中学高校になると、壊滅的と言うに近いほど読書量は少なくなっていく。「小学校時代は本が好きだったのに、中学以降はなぜか読まなくなった」というのが、日本の一般的な傾向だ。

文章を読む力自体は、当然小学生よりも中高生の方が優っている。それなのになぜ読書量が減るのであろうか。

小学校時代の本好き読書好きというのには、実はトリックがある。その読書の多くが児童書なのだ。現在の小学生の好きな本でいうと、「ネズミ君」のシリーズさえも読書に数えられる。これは、完全な絵本だ。絵本に近いものや完全な子ども向けのエンターテインメントを冊数に数えても、大人の読書とはあまりにも開きがあり参考にならない。

(齋藤、岩波新書、2002、p.30)

小学生、主に低・中学年を読む本の内容は絵本や娯楽的要素の高い子ども向けの本であって、おもしろいことを最優先して作られている。だから、簡単に読めてしまうわけで、当然冊数としての読書量も増えてくる。ところが、小学校高学年・中学生になると子どもたちは成長に応じて、自然とそうした内容の本から離れていく。次に向かうのは「自分をつくる」、「自分を鍛える」ための本格的な読書である。データとしての数字だけを追えばたしかに「小学生の読書量は多いが、中高校生になると

読書量が減る」という結果が導き出されるが、内容面を考えると、表れてくる数字とを簡単に比較するわけにはいかないと述べている。さらに、齋藤はこうも述べている。

小学校時代の読書習慣はもちろん大切だ。しかし、長期にわたって中高生が読書離れを起こしている現状から見れば、小学校時代の読書指導にもある程度の問題があると考えられるのが妥当だろう。中高生が読書をしないのは、読書指導がしっかりとなされていないからだ。読書は自然にするものではない。しかし、適切な指導があれば、かなりの者が本を読むようになる。

(齋藤, 岩波新書, 2002, p. 30)

中高校生の時期での本格的な読書への移行につまずいてしまった子どもたちは、気づけば今までのように簡単に読める本は周りにはなく、自分にとってハードルの高い本ばかりになってしまったことで、完全に読書活動から遠ざかってしまうか、小学校時代に読むような娯楽的要素の高い作品しか読めないようになっているというのである。そして、中高校生の不読者の増加は、大人の読書へと進む段階で、「今までたくさん本を読んできたから」という安心した見方で、発達段階に応じた適切な読書指導を行ってこなかったために起こるのだと述べている。

同様に朝比奈も、発達段階に応じた適切な読書指導が行われないことで生じる弊害について述べている。

近年、アダルト・チルドレンなどという言葉が流行しているように、精神的・社会的に未熟なく大人が増えていることは間違いなさそうである。子どもばかりでなく、大人にも読書離れの傾向は著しく、いわゆる軽読書の段階で止まってしまっている例が多く見られる。

(朝比奈, 放送大学教育振興会, 2000, p. 44)

前項で述べた外的要因については、いつか自分の中で読書に目覚め、読書に興味を持ったり、必要観に迫られたりすることで、1日の中でなんとか読書の時間を生み出していこうと努力し、解決していくことができるかもしれない。

しかし、不読者が増加している小学校高学年から中学1年生の時期というのは、読書能力の発達段階から見ても、自分の必要性に合った「自分をつくる」、「自分を鍛える」ための本格的な読書に入る時期であり、子どもたちの成長に合わせて興味を示す本の内容も変化してきているのである。読書指導する側も十分にそれを考慮して指導していかないと、子どもたちは成長のつまずきを起こし、軽読書の段階で止まってしまうたり、不読者が増加したりすることの内的な要因になってしまうのである。

2. 1. OECD「生徒の学習到達度国際調査」(PISA)

2. 1. 1. 日本の15歳児の読書活動の傾向

OECD(経済協力開発機構: Organisation for Economic Co-operation and Development)では、1997年からPISA(Programme for International Student Assessment)と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査に着手している。

PISA調査は、OECDを中心に加盟国はもとより非加盟国の参加も得て、OECDの教育分野の中でも最優先課題として取り組まれている事業の一つである。わが国では、15歳児に関する国際定義に従って、調査対象母集団を「高等学校本科全日制学科」の1年生、約140万人と定義し、層化二段階抽出法によって、調査を実施する対象を決定した。その結果、2000年調査には、全国の135学科(133校)、

約5300人の生徒が調査に参加した。2003年調査には、全国の144学科、約4,700人の生徒が参加した。このPISA2000年調査には、読書についてのさまざまな質問結果が総合読解力の結果と比較して載っている。これらを見ると、15歳の日本人の読書活動に対する一つの傾向が見えてくる。

「毎日、趣味としての読書をどのくらいするか」という質問に「趣味としての読書をしない」と答えた生徒の中で、最も割合が高い国は日本で55%である。OECD平均では32%であり、55%とは、諸外国と比較しても圧倒的に高い数字である。日本を含むG7の国と結果のよい国の12か国の中で比較してみると、第2位はドイツ(42%)、第3位はアメリカ(41%)である。

「どうしても読まなければいけない時しか、本は読まない」という質問に「とてもよくあてはまる」と答えた生徒の中で最も割合の高かったのは、これもまた日本で22%である。OECD平均は13%であることを見ると、この数字も際立って高いことが分かる。

「本を最後まで読み終えるのは困難だ」という質問に「とてもよくあてはまる」と答えた生徒はOECD平均が6%に対して、日本は17%である。この数字についても、日本は12か国の中で最も高い。

「読書は時間のムダだ」という質問に「とてもよくあてはまる」と答えた生徒はOECD平均が8%に対して、日本は7%である。日本は12か国の中で韓国に次いで2番目に低い。

「読書をするのは必要な情報を得るためだけだ」という質問に「とてもよくあてはまる」と答えた生徒はOECD平均が13%に対して、日本は10%である。この数字については、日本は12か国の中で10番目であり、必要な情報を得るため以外にも読書をする傾向の生徒が多いことが分かる。

「じっとして本を読むなど、数分間しかできない」という質問に「とてもよくあてはまる」と答えた生徒はOECD平均が9%に対して、日本は11%である。この数字については、日本は12か国の中でアイルランド、フランスに次いで3番目である。

「家庭の蔵書数」について「501冊以上」と答えた生徒はOECD平均が12%に対して、日本は8%である。また、「1～10冊」と答えた生徒はOECD平均が8%に対して、日本は10%である。この数字については、日本は12か国の中で最も高い。

「図書館の利用率」について「趣味として読書をするために、学校や公共の図書館から本を借りることがどのくらいあるか」という質問に「まったくないか、ほとんどない」と答えた生徒はOECD平均が41%に対して、日本は52%と、ドイツアイルランドに次いで3番目に高い。

以上の統計の中には、15歳の日本の子どもたちが、読書活動に対して否定的な回答をした割合が最も高いとされた項目がいくつか見られた。その項目とは、「毎日、趣味としての読書をしない」、「どうしても読まなければいけないときしか本を読まない」、「本を最後まで読み終えるのは困難だ」、「家庭に本は1～10冊しかない」であった。その他、12か国の中3番目と比較的割合の高かった項目は、「じっとして本を読むなど、数分間しかできない」であった。

逆に、「読書の時間はムダだ」の項目に「まったくあてはまらない」と回答した生徒が「とてもよくあてはまる」と回答した生徒を大きく上回って、ドイツに次いで2番目であった。また、「読書をするのは必要な情報を得るためだけだ」という項目にも、「まったくあてはまらない」と回答した生徒がOECDの平均17%を大きく上回り、29%と12か国の中で最も高かった。

これらの数字から、日本の一般的な15歳児の読書活動に対する傾向を探るとすると、まず、読書に対する意識は高いことが分かる。多くの子どもたちが「読書をするのはムダではなく、きっと自分にとって必要な活動であろう」と意識し、読書活動の意義についても、「調べものをするためだけでなく、自分づくりのために読書はあるのだ」と認識しているのである。このことは、これまでの学校教育の中で、読書活動の意義や必要性について様々な形で指導がなされてきたことの成果の一つであると考えられる。

しかし、高い意識とは逆に、行動の面、読書力の定着の面については世界を国々と比較しても特に低いことが分かる。読書をするのは大切なことだと感じながらも、毎日読書をする習慣を持たず、

その結果、一冊の本を読み終えるにも困難なほどの読書力しか身に付いていないのである。家庭の蔵書数や図書館の利用率が世界の国々と比較して少ないことも、この傾向に大きな関係があると考えられる。

一方、総合読解力の得点結果との関係で見ると、日本の調査結果の中では、どの質問項目を見ても、読書に対して否定的な回答をした子どもたちと肯定的な回答をした子どもたちの間に、大きな得点差は見られない。読書の習慣が身に付いていない日本の子どもたちは、世界の国々と比較しても平均以上の得点を取り、なおかつ読書の習慣が身に付いている日本の子どもたちとそれほど変わらない得点を取っているのである。つまり、2000調査時の日本の15歳の子どもたちは、世界一本を進んで読むことをしようとしないう子どもたちであるが、読書の習慣が身に付いていなくても高い読みとりの力を持った子どもたちであるといえる。この要因で考えられるのは、やはり、現在の小学校、中学校での学校教育の在り方であろう。子どもたちに読書の習慣を定着させる余裕はないが、国語科の指導において、正しく読みとりの力の定着がくり返し図られてきたことの表れであろう。

しかし、2003年調査結果を見ると大きな変化が見られる。総合読解力について、得点によって高い方から低い方へレベル5からレベル1未満の6段階に分け、各レベルの生徒の割合を示した表を見ると、日本の生徒の割合がOECD平均よりも多いのは、レベル5、レベル4及びレベル1未満である。これまで日本は、平均の層が厚いとされていたが、今回の調査では得点の低い層が大幅に増えているのである。日本の「レベル1 未満」の7.4%は、前回の2.7%から4.7%もアップし、加盟国平均6.7%をも超えている。また、文章やグラフの読解力で日本は14位（498点）と、前回の8位（522点）から順位も平均点も下がり、加盟国の平均（500点）水準に落ち込んだ。

これは、明らかに日本の15歳児の学力に低下、二極化の現象が表れていることになる。この様子は、中学生の1か月の平均読書冊数がわずかにアップしているのに対し、不読者も依然かなり高い数字で存在している現在の状況と重なるところがあるのではないかと考える。

2003年調査結果の発表を受けて、読売新聞は社説で以下のように述べている。

なぜ、読解力が低下したのか。文科省は、子供の読書量が落ちていること、自分の意見を述べたり書いたりする授業が不足していることなどを挙げる。

授業改善のための指導資料を早急に作り、教育現場には「朝の読書」の一層の拡大を促すという。本好きの子供を多く育てることは何より大切だろう。

最近では、写真やイラストを多用した絵本のような薄い教科書が主流となり、古典や難解な長文などは姿を消す傾向にある。大学入試の多くがマークシート化され、中学、高校ではそれに応じた指導が行われている。対策を講じる際には、こうした現状も考慮する必要がある。

（読売新聞社説、2004年12月8日付）

2000年調査の結果では、日本の子どもたちは、「世界一本を進んで読むことをしようとしないう子どもたちであるが、読書の習慣が身に付いていなくても高い読みとりの力を持った子どもたちである」といった考察が出てきたのであるが、そこからわずか3年で、「世界一本を進んで読むことをしようとしないう子どもたちであり、読書の習慣が身に付いていないことから、読みとりの力も低下してきている子どもたち」に変化してきている。しかし、この変化は、子どもたちの実態からすれば当然予想される変化であり、2006年調査時の結果もさらに下がることも予想される中、学校教育の中で早急に手を打つ必要性がさらに確立された結果である。「読書は必要である」という意識と「読書の習慣がある」という実態が結びついた中でこそ、この問題の解決は図られるのではないか。

2. 読書活動の意義・方法

2. 1. 読書活動カリキュラムの必要性

2. 1. 1. 日本語力の低下

2003年度版『第56回読書世論調査』の中で、「日本語力の低下」と「活字離れ」の関係について論じられている。

「自分の日本語力が不足していると思うことがあるか」という質問に対する結果は、5年前と比較しても「たくさんある」、「時々ある」の数値の合計は、ほとんど変化が見られない。しかし、10代後半の数値を見ると「たくさんある」、「時々ある」の数値の合計は5年前に比べて7%も上がっている。しかも、「たくさんある」だけで見ると12%も上がっている。これは10代から70代以上までの各年代の上昇率の中でも圧倒的に高い数字である。つまり、現在、最も日本語力が不足していると自分自身で感じている人が増えているのは10代後半であるという結果になる。

さらに、「日本語力で不足しているもの」という質問に対して10代後半の人たちの回答に着目すると、前回調査より一番上昇率が高かった回答は、「人と話す力」で11%の上昇である。他の回答を見てもほとんど数値が変わらないことや、それほど上昇率が高くないことを見ると、10代後半の「人と話す力」が不足しているという認識は、非常に大きな問題であると思われる。

また、これら日本語力の低下の原因を「日本語力低下は活字離れに起因する」と考える人が全体の78%を占め、前回調査より12%上昇している。しかも、前回調査の時は70%を超えていたのが50代、60代だけであったのに対し、今回は20代以上全ての世代で70%を超す結果となった。10代後半でも10%の上昇率で、「活字離れ」を危惧する人の割合が全ての世代で高まっていることがわかる。

さらに、自分自身の日本語力の不足を感じる人ほど「活字離れ」を主な理由と考え、「そう思わない」人との開きが一番大きかった。

これらの結果を見ると、10代後半、つまり義務教育の9年間を終えて数年しか経っていない若者たちは、特に人と話をする時に自分たちの日本語力不足を強く感じていることがわかる。そして、この日本語力の低下が本を読まなくなったことに起因していると考える人が増えてきていること、特に、日本語力不足を強く感じている人ほどそう考えていることがわかる。

本来、義務教育の教育課程を修了したばかりの若者ならば、それまでの学習課程の中で身につけてきた国語力にある程度自信を持っていてもよいはずである。しかし、そうでない人たちがここ5年間のうちに急増しているこの問題は、私たち学校教育の現場に携わるものたちにとっても大きな危機意識を持って受け止めなければいけないだろう。

2. 1. 2. 学習指導要領の目標との関係

平成14年度より実施された新学習指導要領には、教育課程審議会の答申における国語科の改善の基本方針が次のように示されている。

「小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を重視し、国語に対する関心を高め国語を尊重する態度を育てるとともに、豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る。特に、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。」

(小学校学習指導要領解説 国語編, 文部省, 1999, p.3)

さらにそのための国語科の目標は、次のように示されている。

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」

(小学校学習指導要領解説 国語編, 文部省, 1999, p.4)

今回の改訂のキーワードは、「伝え合う力」と言える。この「伝え合う力」について文部省(当時)は、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力でもある。これからの情報化・国際化の社会で生きて働く国語の力であり、人間形成に資する国語科の重要な内容となるものである。」としている。

この方針の改善には、先に述べた義務教育を終えた若者の実態が大きく関わっていると考えられる。もちろん、これまでも学校教育の中でこの力の育成に尽力してきたのであるが、うまくいっていない部分があることは、義務教育を受けてきた若者自身にも感じられているところなのであろう。

この力が不足していると感じている人が多く、その不足の原因を「活字離れ」ととらえている人が多い以上、現在の学校教育の中にじっくりと本を読む時間が確保され、自ら本に親しみ、学校生活の中で本を読むことが自然な活動であるような読書活動カリキュラムが必要になってくるものと考えられる。

2. 2. 読書の必要性

2. 2. 1. 読書活動推進に関する国や地方公共団体の動向

平成11年8月、子どもの読書活動を国を挙げて支援するため、平成12年を「子ども読書年」とする衆参両議院の決議がなされた。

また、平成12年5月には、国立国会図書館の支部図書館として国際子ども図書館が開館し、さらに、平成13年4月には、子どもゆめ基金が創設され、民間団体の行う子どもの読書活動等に対する助成が始まった。

これらを中心となって進めてきた超党派の「子どもの未来を考える議員連盟」では、「子ども読書年」を契機とする子どもの読書活動の推進をするための取り組みをさらに進めていくため、平成12年12月に「子ども読書活動振興法案作成プロジェクト」を設置し、法案の立法作業に取りかかった。

そして、平成13年11月、議員立法により「子どもの読書活動の推進に関する法律案」が提出され、同年12月に成立、公布・施行された。

さらに、「子どもの読書活動の推進に関する法律案」の第8条第1項の規定に基づき、平成14年8月、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が閣議決定された。

この基本計画は、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備を推進することを基本理念として、施策の総合的かつ計画的な推進を図るために定めるもので、平成14年度から平成18年度までのおおむね5年間にわたる施策の基本的方向と具体的な方策を明らかにしている。

この「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の第1章には、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものであり、社会全体でその推進を図っていくことは極めて重要で

ある」と書かれている。以下、第2章 基本方針、第3章 子どもの読書活動の推進のための方策においても、子どもたちの読書活動の推進に必要な取り組みが具体的に書かれている。

この「子どもの読書活動の推進に関する法律」第9条（都道府県子ども読書活動推進計画等）を受けて、各都道府県・各市町村では、それぞれの子ども読書活動推進計画を策定するようになる。以下はその条文である。

都道府県は、子ども読書活動推進基本計画を基本とするとともに、当該都道府県における子どもの読書活動の推進の状況等を踏まえ、当該都道府県における子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画（以下「都道府県子ども読書活動推進計画」という。）を策定するよう努めなければならない。

2 市町村は、子ども読書活動推進基本計画（都道府県子ども読書活動推進計画が策定されているときは、子ども読書活動推進基本計画及び都道府県子ども読書活動推進計画）を基本とするとともに、当該市町村における子どもの読書活動の推進の状況等を踏まえ、当該市町村における子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画（以下「市町村子ども読書活動推進計画」という。）を策定するよう努めなければならない。

3 都道府県又は市町村は、都道府県子ども読書活動推進計画又は市町村子ども読書活動推進計画を策定したときは、これを公表しなければならない。

(http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/index.htm)

岐阜県では、平成16年3月に「岐阜県子どもの読書活動推進計画」が策定されている。「第1章 子どもの読書活動推進計画策定にあたって」では、策定の趣旨を以下のように示している。

子どもの読書活動推進計画における読書活動は、大きく分けて二つになります。第一は家庭などの読み聞かせによる「聞く読書」活動で、第二は、自ら本を手にとって読む「読む読書」活動です。

「聞く読書」活動の中心的な場所は家庭です。親子が同じ時間を共有し、いっしょに絵本などを楽しむ読書活動で、子どもが言葉と出会う機会でもあります。「赤ん坊にどう声をかければよいか分からない」という親や保護者などでも、絵本を開けば言葉があります。子どもは絵本などを心を込めて読んでもらうことで、自分が愛されていると感じます。そして、温かい言葉をたくさん受け取り、心の中にためていきます。そうした言葉をたくさんためることができれば、子どもは自分の気持ちを言葉で表すことができるようになります。（中略）

子どもは成長するにつれて、自ら本を手にとって読む「読む読書」活動へと移り変わっていきます。「読む読書」活動は、単に知識を深めるだけでなく、過去や現在、未来についての想像力を広げ、また、読解力や論理的に考える力、多様な表現力をはぐくむうえで欠かせないものです。「聞く読書」活動を十分に楽しんできた子どもは、読書活動は楽しいものであるということが身に付いています。「読む読書」活動へと移行するとき、大人によって心引かれる本と数多く出会うことができれば、読書活動は持続します。「読む読書」活動には、黙読だけでなく音読もありますが、音読については、素読や朗読を通じて暗唱することも大切であるといった指摘や、声に出して本を読むことによって脳が活性化されるといった研究もあります。成長段階に応じたさまざまな読書活動を楽しみ、読書力を身につけた子どもは、人や自然と共生する関係を築くことができます。

(岐阜県教育委員会, 2004, p. 1 - 2)

このように、平成13年度に提出された「子どもの読書活動の推進に関する法律案」に始まった国を挙げての読書活動の推進活動は、地方に広がり、制度化されてきている。また、それぞれの段階で読

書活動の重要性について述べてあるが、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものであり、社会全体でその推進を図っていくことは極めて重要である」という内容に関わって統一されている。

国がこうした読書活動の推進の必要性を強く主張しているのは、OECD「生徒の学習到達度調査」(PISA)の結果が影響していると言える。国が「趣味としての読書」が成立せず、「本を最後まで読み終えることが困難だ」という子どもの割合が世界的に見て最も高いという実態が子どもの読解力を低下させている現状を打開するために、読書活動の意義を全国に広め、生涯学習の一環としての読書活動を定着させようというねらいがあると考えられる。

2. 2. 2. 読書活動推進に関する一般の動向

この読書活動推進の動きは学校現場だけに留まらず、大学や一般にも広がってきている。

もともと、10年から15年ぐらいに一回、日本語ブームというものがおきると言われているが、1999年に出版された『日本語練習帳』(大野晋 岩波新書)を皮切りに、2001年出版の『声に出して読みたい日本語』(齋藤孝 草思社)が拍車をかけた形で日本語ブームがおき、たくさんの日本語に関する書籍が出版され、書店には「日本語本コーナー」ができるほどであった。これらの背景には、忘れられかけている日本語の正しさ、美しさ、成り立ちを再確認し、日本語を守っていこうという風潮があったのではないかと考えられる。その日本語ブームも一段落していく中で、齋藤は日本語を再認識するだけでなく、読書活動そのものを推進していくための書籍を多く出版した。

齋藤は、読書活動の意義を、小学生に向けたわかりやすい言葉で以下のように述べている。

紙の上の文字は、動きもしないし、絵が見えているわけでもない。でも読んでいる人は、自分の頭の中に絵をつくり、それを動かしながら読んでいきます。その能力を「想像力」といいます。英語ではイマジネーションという。

そう、本を読む＝想像力を鍛える、ということなんです。これがすごく大切なんだ。(中略)

想像力がつくと、人に優しくなれる。本を読めば読むほど、優しさの体力がドンドンついてくる。ほかの人の気持ちが分かるようになるからだね。本をたくさん読んでいる人のほうが、読んでいない人よりも、ほかの人の気持ちがたくさんわかりますよ。

(中略)

想像力を鍛える一番の方法は、本なんです。読書なんです。読書は、なにしろ想像力のみで成り立っているんですから。だって、文字しか書いてないんですから。それなのに、笑ったり、泣いたりできるというのは、想像力以外のなにものでもないんです。

(齋藤, PHP研究所, 2004, p. 44-48)

他にも、読書で想像力を鍛えることで、人の気持ちがわかるようになったり、人生経験が増えて人生を何倍も楽しめたり、言葉をたくさん知って、自分の気持ちをうまく言葉で表せたりすることができるとして、小学生でも納得のできるせつめいをしている。

さらに「文脈力」という言葉を使って「なぜ本を読むと頭がよくなるのか」についても述べている。

本を読むと、人の言った言葉をまちがってとらえることがなくなる。これを“文脈力がつく”といいます。“文脈力”というのはぼくがつくった言葉なんだけれど、話の文脈をつかまえる力です。

では、文脈について説明しよう。脈というのは“つながり”です。山脈という言葉は聞いたことがあるでしょう？山と山をつながりやを山脈といいます。同じように、文と文とのつながりを文脈と

います。

「前にこう言ったから、いま、この話をしている。」

というのが文脈です。

そして、この文脈をキャッチして、わかる力が“文脈力”。その力がある人は、文脈力のある人。そして、じつは“頭がいい”というのは、文脈力のあるということなんです。

(齋藤, PHP研究所, 2004, p.66-67)

また、川島は、脳機能イメージング研究の成果によって、脳科学の分野から、科学的に読書活動の意義を唱えた。川島は、自らが研究してきた前頭前野について、以下のように述べている。

脳というのはさまざまな働きを持っていますが、これらの中でも最も大切な場所として私たちが注目しているところがあります。それが、前頭前野と呼ばれている場所です。これは、前頭葉の前側にある場所になります。前頭前野はなぜ大切だと考えているか。例えば、皆様方が私ども脳の専門家に「人間とは何ぞや」、こういう問いを発せられたとします。それに対する私ども脳科学者の答えは、「発達した前頭前野を持つ動物である」、これが答えになります。人間を特徴づけているのは、実は前頭前野という脳があって、それがきちんと働くから人であるというふうに私たちは考えています。

(http://www.pref.gifu.jp/s11121/noukagaku/kawasima_kouenroku.htm)

この前頭前野の働きが、行動の抑制、他者の表情を読んだり、他者の気持ちを理解して行動したりするという人間らしいコミュニケーション、意思決定、やる気、感情のコントロール、笑い、記憶などに大きく関わってきているとしている。

川島は、私たちが心と呼んでいるものが前頭前野にあると考え、子どもたちを育てていく、子どもたちに生きる力をつけるとは、子どもたちの前頭前野を鍛えてあげるということではないかとしている。川島は、この前頭前野の発達に読書活動が大変効果があるという研究結果を出し、子どもたちにわかりやすい言葉で解説している。

これは、大学生が、日本語の文章を、声に出さずに黙読しているときの脳の働きです。文章を目で見えて読んでるので、ものを見る働きをする視覚野が左右の脳ともに働いています。漢字の知識の引き出しがある下側頭回、ことばの意味の引き出しがある角回も、左右の脳で働いています。(中略)

前頭前野を見てください。左右の脳で、活発に働いています。読書が、なんと、前頭前野もきたえてくれる、ということが、はっきりしました。

(川島, くもん出版, 2003, p.59)

これは、日本語の文章を、声に出して読んでいるときの脳です。黙読していたときにも働いていた、視覚野、下側頭回、角回、ウェルニッケ野、前頭前野は、みなその働きが強く、大きくなっています。そのほかに、声や音を聞く聴覚野も働きだしました。自分の声を、自分の耳で聞いているのですね。

このように音読は、脳のたくさんの場所を、活発に働かせます。前頭前野をきたえるためには、同じ読書でも、声に出して音読すると効果倍増だ、ということですね。

(川島, くもん出版, 2003, p.62-63)

大人を相手に、独自の読書感を語って読書の良さを伝えようとする書籍は多く出版されているが、子どもたちに明確に、かつわかりやすい言葉で読書活動の意義を示し、三色を使って線を引きながら読む方法や声に出して音読するなど、具体的に方法を示した齋藤や川島の功績は、大変大きなものであるし、現に次から次へと出版される齋藤、川島の書籍は書店でも人気コーナーに並ぶことが多い。

2. 3. 朝読書

2. 3. 1. 朝読書の効果

朝読書とは、1988年4月、林公教諭、大塚笑子教諭の二人が提唱し、船橋学園女子高校（現・東葉高校）で実践を始めた活動である。『朝の読書が奇跡を生んだ』（高文研）などの書籍が刊行されたり、1993年12月30日、朝日新聞の天声人語で「朝の読書」及び林公教諭が紹介されたりしたことで、全国的に活動が広まっていった。1997年には、朝の読書推進協議会（代表 林公教諭・副代表 大塚笑子教諭）が発足し、実践校が200校を越えた。2004年現在、18000校を越える小中高等学校に活動が広まり、様々な成果を挙げている。

林教諭は、「朝の読書」を始めたころをふり返り、以下のように述べている。

私たちの「朝の読書」は、「毎回定まった時間に適切な量の食事を摂らなければ人間は成長できないし、生命の維持さえ困難になる」というごく平凡な当たり前のことを、学校教育の現場に持ち込んだだけであり、その結果として当然のことながら、子どもたちはそれなりの成長を遂げ、最低限の生命の維持をはかることができたのです。ごく当たり前のことを当たり前のこととして断固実行することによって、ごく当たり前のことを実現させたにすぎないのです。

（林、小学館、2003、p. 6）

林教諭は、自身の著『朝の読書が奇跡を生んだ』というタイトルが波紋を呼んだことは喜ばしいことであるが、読書をするには人間が成長するためには必要不可欠なものであることに確信を持ち、当たり前に行っていくことで、成果は当然出てくるものだとしている。

その「朝の読書」を行うことで生まれる効果を、林教諭は大きく8点に分けて述べている。

- (1) 静寂と集中の時間が生まれること
 - ・騒ぎまくっていた子どもたちが全員読書に集中し、毎朝水を打ったように全校が静けさに包まれる。
- (2) 他の活動への波及効果があること
 - ・落ち着いて朝の会が始まり、連絡がよく伝わったり、1時間目にスムーズに入れたりする。授業への集中も高くなる。
- (3) ほとんどすべての子どもが本を読めるようになること
 - ・本を読む能力のない子でも着実に力をつけ、本を読む能力がある子にも好きな本を読む時間を確保してあげられる。
- (4) すべての子どもの学力が向上すること
 - ・難しい言葉が理解できた、漢字が読めるようになった、読むスピードが早くなった、想像力がついてきたなど、学力の土台である言語能力が向上する。
- (5) 日常生活に好ましい変化が出てくること
 - ・遅刻が減る、朝ご飯をちゃんと食べるようになる、マンガやテレビを見る時間が短くなる、

本屋や図書館に出かけるようになるなど、日常の生活が変わる。

- (6) 豊かな心と人間関係が育つこと
 - ・人の痛みや苦しみがわかり、思いやりの心が生まれるなど、広く深い人間関係が生まれてくる。
- (7) すべての子どもが人間的に成長できること
 - ・本の中でいろいろな人間の生き方に出会い、人間を知り、社会を知り、自分に目覚めていく。
- (8) 子どもたちの変化が教師にも影響を与えること
 - ・子どもの力を信じられるようになり、教師に自信を与え、元気にしてくれる。

「朝の読書」を行うことで、当然のようにこれだけの結果が生まれてくるはずだとしている。これらの効果を見ると、前章までに述べてきた読書活動が適切になされてこなかったことがもとで起きている数多くの問題点を解決できるものである。

2. 3. 2. 朝の読書の理念

林教諭によると、朝読書には4つの理念があり、その内容は以下のものであると述べている。

「朝の読書」とは(その理念) 「学校図書館」No.567より

- (1) 全校一斉に行う みんなでやる
 - ・学校教育にふさわしい秩序を回復させ、しかもその結果として子どもたち(そして教師も)の著しい成長を勝ち取ることで、学校、教師のあるべき正しい権威を確立するため。
 - ・全校一斉で取り組んでいるという迫力で一人ひとりの生徒を動かすため。
 - ・全校一斉は、ある定まった時間にみんなで一斉に同じことをするという学校の活動スタイルにあっている。
 - ・全員そろって同じことをすることによって、生徒を指導する力が比較的弱く、そういうことが苦手な教師を助けることができる。
 - ・全教職員が全く同じ条件で同じことに取り組むことによって、相互理解を深め、相互協力の体験を実際に積み重ねていくことができる。
- (2) 10分間だが毎朝続ける 毎日やる
 - ・現行の時間割を大幅に変更することなく、比較的簡単に実現できるようにするため。
 - ・勉強が嫌いな子、読書が苦手な子にとって、10分間は、我慢できる限界。
 - ・毎日の積み重ねが確実に子どもの力を伸ばしていく。
 - ・毎朝続けることで基本的な生活習慣の崩れをただすため。
 - ・理屈抜きに体で覚えさせることによって、いってみれば、習慣の力の偉大なこと、規律正しいことの良さといったものを、どの子どもにも認識させることができる。
- (3) 読む本は自分で選ぶ 好きな本でよい
 - ・全ての生徒が自主性、主体性を身につけられるようにするため。
 - ・生徒全員が自分にその時本当に必要なものを学ぶことができる。
 - ・生徒全員がそれぞれ自分の力にあったものを選ぶことができる。

- ・好きな本でよいことにすれば、生徒全員が自然と自分の個性にあったものを選べる。
- ・教師の手間が省ける。
- ・たとえ10分間とはいえ、教師も必要最小限度の勉強ができる。

(4) 本を読むこと以外何も求めない 　　ただ読むだけ

- ・生徒たちのよけいな負担を省くため。
- ・教師にとってもよけいな負担を省くため。
- ・生徒全員に自分自身を見つめる余裕を持たせるため。
- ・生きていること自体を純粹に喜ぶという体験を生徒全員に味わってもらうため。
- ・純粹に本の世界に没入することによって、生徒たちはそこから深い感動を得て、それを契機として自分自身の友人関係や家族関係、教師との信頼関係といったものにまでより深く、より豊かに発展させていくことができる。

(<http://www.geocities.co.jp/Bookend/5341/>)

この四原則は、「朝の読書」が単に学校教育の改善といった狭い枠にとらわれたものではなく、今まで日常生活では特別扱いされてきた読書というものを、文字どおり日常茶飯事のこととして私たちのごく普通の生活の中に入れ、毎日10分は読書をするのが当たり前という日常生活をつくり上げること、つまり、日常生活の構造改革、新しい日常生活のスタイルの創造をめざしているとしている。

2. 3. 3. 先行実践による児童生徒の変化

全国で「朝の読書」活動を行っている学校は、朝の読書推進協議会調べによると、2004年12月24日現在で小中高等学校合わせて181,810校となっている。全校一斉が15,609校、学年単位が1,571校、学級単位が900校、授業単位が100校となっている。しかし、これは朝の読書推進協議会にアンケートに答えた学校のみを集計であり、これ以上に「朝の読書」を実践している学校は多いと考えられる。

1995年に「朝の読書」運動化がスタートしてから、およそ10年が経つ。この間に全国でさまざまな教師が「朝の読書」取り組み、実践・成果を残してきているわけで、その数も膨大なものになる。実際、全国の教師から寄せられた「朝の読書」の実践報告をまとめて出版している書籍も数多い。どの実践も基本的に四原則を忠実に守り、そこに学校や教師独自の思いを含めて、学校や学級の立て直しに成功した過程が細かく記されている。

その中でも、特に児童生徒の言葉として、自分自身の変容が語られているものに着目してみた。

- ・最近家でも本を読むようになった。
- ・三年になってからは自分が本を薦める側になった。
- ・初めて小説を最初から最後まで読むことができました。
- ・人に対して優しくなれたと思うし、感情が豊かになった。
- ・読み終わると達成感でいっぱいになってうれしい気持ちになります。
- ・読書を始めると一日がとても快く過ごせた気がした。
- ・いったん読み出すと続きが読みたくなるから不思議。

など、これ以外にもさまざまな変容が記されている。これらの姿は、新しい学習指導要領の国語科の目標とするところや、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の中にあるねらいと大きく重なっていることがわかる。

3. 勤務校での実践

3. 1. 実践の様子

3. 1. 1. 高山市立新宮小学校での実践

新宮小学校では、平成15年度の2学期が始まり運動会がすんだころから朝の読書の実践を始めることにした。呼び方は、言いやすさから「朝読書」とした。新宮小での朝の活動は、毎日違ったメニューが組まれて、月曜日は学年集会、火曜日は保護者による各クラスでの本の読み聞かせ、水曜日と金曜日は基礎基本の定着ということでドリルや小テスト、木曜日は英語のビデオを視聴する時間となっていた。本来ならば、その時間を朝読書に充てていくことが一番無理がないと思われたが、我がクラスだけ全く違った活動をしていくわけにもいかず、苦肉の策として、その後の朝の会の時間から10分間を生み出し、朝読書の時間に当てることにしてみた。学年は2クラスであったが、もう一つのクラスにも協力していただき、なんとか自分が担当する6年生だけが毎日朝読書の時間を確保できたというスタートになった。

朝読書の四原則を話し、次の日から教室においてある本か家や図書館から本を準備しておくよう説明したところ、子どもたちは結構興味深そうな表情で聞いていた。予想通り、マンガや雑誌をのぞくことについての質問も出たが、「マンガや雑誌は別にいつでも読めるから、この時間はどっぷり活字にひたってみよう」という説明ですんなり納得していた。その後も、お互いに自分が持ってこようと考えている本の題名や家にある本のことを話していて、朝読書を楽しみにしている様子が伺えた。

子どもたちの人気は、『ハリー・ポッター』シリーズであった。以前から家で読んでいた子どもたちは、学校でも読める時間ができたことを喜び、初めて読もうとしている子どもも、「家だったら絶対こんなに分厚い本は読まないから、こういう時間があればハリー・ポッターが読める」と言って、学級文庫の『ハリー・ポッター』シリーズを手にとっていった。

原田自身も初めて行った朝読書というものだったが、10分間の中で子どもたちがすぐに読書に没頭していく姿を見て、読書というものが持つ力の大きさに大変驚き、感動した。子どもたちがそれぞれ選んできた一冊を何気なくチェックしてみると、実に様々なジャンルや内容ものを選んでおり、その幅広さもうれしかった。生徒指導上やや問題が見られた子が大平光代著『だからあなたも生きぬいて』を選んで熱心に読んでいる姿を見ると、その子の新たな一面を見たような気もした。やはり子どもたちはこういう時間を求めているのだということを確認し、アンケートを採ったりしながら卒業までこの活動を続けた。

3. 2. アンケート結果の考察

3. 2. 1. 新宮小学校 10月のアンケート結果より

新宮小学校では2回のアンケートを行った。アンケートを採った理由は、子どもたちの意識の変容を探っていくためである。朝読書の効果を読解力の向上などで数値化しようとしても、授業での学習など他の要素が占める割合も高いため、数値化しにくい。よって、定期的にアンケートを採りながら、子どもたちの朝読書に対する意識の変容を見ていくものとした。

1回目は、夏休みが明け、運動会の取り組みも一段落した10月初めに行い、2回目は、3月の卒業前に行った。

調査対象は、6年1組(自分の学級)33名と6年2組34名の計2クラスで64名である。(アンケー

ト当日欠席者含む)

1回目の10月のアンケートでは、活動前の読書量の実態や読書に対する意識、小さいときの読み聞かせの経験との関連などについて調査した。アンケートの結果は表-3-1のようである。

取り組み前の「9月1カ月間に何冊の本を読みましたか」という質問に対しては、1組2組を合わせて17名が「0冊」と答え、全体の24%であった。それ以前の夏休み中についても不読者は6名で9%いた。全国の統計から見ると、9月は運動会の取り組みでバタバタして忙しかったとはいえ、24%の不読者は非常に高い割合である。

また、「本を読むことは好きですか」という質問には、どちらのクラスも「大好き」「どちらかといえば好き」の人数が「どちらかといえばきらい」、「大きらい」の人数を上回り、読書に対する興味関心は低くはないことがわかる。

つまり、読書に対して興味関心はあるけれども、実際の読書活動にたどり着くまでは至っていない現状がわかる。

1組と2組で違いがでていたといえば、「本を読むことは大切だと思いますか」という質問である。1組で「大切である」と答えた人数が27名で82%であるのに対し、2組は19名で56%であった。これは「大切だとは思わない」と答えた14名、41%とかなり拮抗した数字になった。これまでの読書体験がもとになっていると思われるが、読書の必要性を感じることなく育ってきてしまった結果であろう。この原因とも言えるものが、本を読んでもらった経験の差になると考えられる。「これまでに本を読んでもらったことがありますか」という質問に対し、1組は「よく読んでもらった」、「まあまあ読んでもらった」22名で67%なのに対し、2組は17名で50%である。つまり、小さいころによく本を読んでもらった子どもが半数しかいないのである。こう見ると、幼少期に本の読み聞かせをしてもらっているかどうか、後のその子どもの読書に対する姿勢を決定するとも考えられる。

読み聞かせをしてもらってきた子どもたちの中で、「一番読んでくれたのは誰ですか」という質問に対して一番多かったのは、圧倒的に母親であった。父親はどちらのクラスとも0名であり、家庭の中では、子どもに本を読んで聞かせる役割のほとんどを母親が受け持っていることがわかった。また、家族以外で見ると、多いのは、幼稚園・保育園の先生であり、学校の先生と答えた子どもは少なかった。小学校の低学年などは特に読み聞かせをしてあげることが大切であるが、実際にしてもらっていたかどうかはわからないが、こどもたちの記憶には残っていないようである。ここに小学校の、読み聞かせを含めた読書指導の在り方の研究の必要性を見ることができる。

3. 2. 2. 新宮小学校 3月のアンケート結果より

卒業間近の3月に採ったアンケートは、半年間、朝読書の活動を進めてきての結果である。私にとっても、どういう結果が出るのか、非常に興味深いところであった。結果は表-3-2にまとめている。

まず、朝読書の活動の中での読書量であるが、それぞれの書籍をそれぞれのペースで読んでいるため、単純に冊数の多さだけで見るとはできないとしても、完全に0冊という児童はいなくなり、学年の不読者は0%になった。

子どもたちの朝読書の時間に対する意識を見ると、「朝読書の時間についてどう思いますか」という質問では、全体で「あってよかった」、「ないよりはあった方がいい」という肯定的なとらえ方をしている子どもが62%と、「つらい時間」、「ない方がいい」という否定的なとらえ方をした子どもの7%と比べ、圧倒的に高い数字となった。この肯定的なとらえ方は、「今年度、6年生のみで朝の読書を行っています。来年度の進め方について意見を参考にさせて下さい」という質問でも見られ、「全校で行うといい」が全体で81%、「行わない方がいい」の9%に比べ、これも高い数字となっている。

また、実際の読書量で見ても、「とてもふえた」、「少しふえた」が全体の77%になり、この半年間

で4分の3以上の子どもたちの読書量を上げた取り組みであったことがわかる。

子どもたちは、主に2時間目と3時間目にある20分の休み時間中や、給食を食べ終わったときなどに、わずかな時間を読書の時間にあてるようになった。

「読書の良さはなんだと思いますか」という質問については、「読解力がつく」が一番多く、続いて「想像力がふくらむ、漢字が覚えられる、熱中できる、楽しい、物事を多方面から見られる、時間がつぶせる、リラックスできる」といった良さを感じていることがわかった。

3. 2. 3. 新宮小学校での成果と課題

10月より半年間、朝の読書活動を行ってきたことで、新宮小学校の6年生にも朝の読書活動が受け入れられ、読む力がついてきたことがわかった。不読者を無くし、朝だけでなく、休み時間も使って自ら本を手にとって読書をしていくことができる姿を見せたことは大きな成果である。

実際に子どもたちも、朝読書をしてきたことで、読書量が増えてきただけでなく、読書が楽しくなってきたという意見も多かった。今までの学校生活の中ではこの充実感を味わうことなくすごしてきたわけであるから、たった10分間もたらす力がいかに大きいかかわかる。

「あなたは現在、本を読むことが好きですか」という質問を10月のアンケート時と比較してみると、「大変好き(大好き)」が10月に全体で31%だったのが、3月では42%の11%の増加となった。「まあまあ好き(どちらかといえば好き)」が3%増、「それほど好きではない(どちらかといえばきらい)」は6%減、「きらい(大きらい)」は1%減と、わずかではあるが、よい傾向が現れている。半年間の活動でも読書への興味関心の底上げができた状態であると考えられる。

しかし、詳しく見ていくと、いくつか課題はある。

まず、10月のアンケートでの「朝読書の時間についてどう思いますか」という質問では、1組と2組では大きな違いが出てきた。1組は「あってよかった」が22名で67%だったのに対し、2組は11名で32%と半分以下の数字になった。さらに、「ないよりはあったほうが良い」を含めた割合が、1組は82%と高い数字が出て、朝読書を肯定的にとらえていたのに比べ、2組は44%と、「どちらでも良い」と答えた割合と同じ数字にとどまり、さらには、「つらい時間」、「ないほうが良い」を合わせた割合が15%になるなど、かなり、朝読書に対して否定的にとらえていたことがわかる。これは、「今年度、6年生のみで朝の読書を行っています。来年度の進め方について意見を参考にさせて下さい」という質問の結果にも表れ、1組はほぼ全員が「全校で行うとよい」と答えているのに対し、2組は18%が「行わない方がよい」と答えている。

この違いは他の結果からも見られ、「朝読書をするようになって、読書の量は増えましたか」という質問では、「とてもふえた」「少しはふえた」と答えた割合は1組も2組もほぼ変わらないが、「もともと読んでなかったし、今も変わらず読まない」と答えた子どもが、1組の1名に比べ、2組は5名となった。

また、「朝読書で読む本を、朝読書の時間以外にも学校にいる間にも読みますか」という質問でも、「読まない」と答えた子どもの割合が1組に比べ、2組はその倍以上という数字になった。

最後の「現在、読書が好きですか」という質問は、9月の時に同じ質問をしているので変化を見て取ることができるが、1組の「どちらかといえばきらい」、「大きらい」の人数が9名から5名に減少したのに対し、2組は14名から13名とほぼ同数のまま終わることとなった。

これらの課題の原因を考えたとき、朝読書の実践には教師側の意識が大きく影響してくるのではないかと考えた。具体的な取り組み方法・内容は1組も2組も同じである。自分のクラスだけ特別な活動を加えてきたわけではない。10月の段階で2組にも朝読書の実施をお願いしたときに、担任には子ども向けの「朝読書を始めましょう」というプリントのみを渡し、口頭で簡単に四原則に

ついて打ち合わせをただでスタートしてしまった。そんな中で、わずかな朝の会の時間をつぶして活動してもらうには、徹底が無理があったかもしれない。実際、2組の担任の先生の判断により、朝読書がいろいろな活動に変更になったりした部分は大きいようである。我が1組の方は、「とにかく結果を出していきたい」という思いで子どもたちに毎朝の読書をさせてきたが、2組担任との途中の打ち合わせや徹底を怠ってしまった感はある。

たしかに、朝の会の活動一つをとってもそれぞれの担任に思いがあり、また、朝読書が学校全体のカリキュラムに定着してないこともあって、同じペースで徹底してもらうことはなかなか困難である。しかし、ここに大きな課題があって、やはり学校のカリキュラムの一部として朝の読書が位置付くことと、そのための教師の姿勢や意識を共通認識して徹底させていくことの必要性を強く感じた。逆に言えば、たった半年間でも、教師が朝読書に対し、高い意識を持って子どもたちに読書の機会を与えていくことで、子どもたちの姿は確実に向上していくことを確信した半年間でもあった。

おわりに

様々な観点から学校教育における読書活動の推進の必要性を見てきたが、朝読書の実践により、その効果は確証された。あとは、いかに全校の活動としてカリキュラムに組み入れていくことができるかが課題である。

一方で、朝の読書活動はたしかに大きな成果を生むものであるが、生徒たちの学年が上がり、朝の読書活動が実践されていない学校に進み、いざ、自ら本を手取るかどうかの場に立たされたとき、やはり、多くの子どもが逆戻りし、不読者になってしまうのではないか、という不安もある。

このことは、1章で述べた「本格的な読書に移行する時期での適切な読書指導の必要性」にも関わってくるが、朝読書を行うことによって、誰もが読書の楽しさに気づき、10分間の時間が確保されていることを喜びはするが、自らどんどん本を探し、手にとって読んでいけるようになる子どもは、実はごく一部であって、それ以外の多くの子どもたちは、適切な時期に適切な読書指導や読書が継続して行える環境がないと「本を読む力」が育成されず、結局、不読者に戻ってしまう傾向が強いことがわかる。

今、私たち学校の教員に求められるものは、朝の読書によって読書に向かう姿勢や意識の高さを掘り起こし、さらに、それをいかに長く持続させるかということ、そして、意識が高くなってきたときに、きちんと「本を読む力」を子どもたちに身につけさせるだけの指導力を持つことであると感じた。

表-3-1 平成15年度 読書アンケート 10月

No.	項目	1組	%	2組	%	合計	%	
1	9月1ヶ月間に何冊の本を読みましたか	①参照		①参照		①参照		
2	夏休み中に何冊の本を読みましたか	②参照		②参照		②参照		
3	本を読むことが好きですか	大好き	12	36	9	26	21	31
		どちらかといえば好き	10	30	9	26	19	28
		どちらかといえばきらい	7	21	11	32	18	27
		大きらい	2	6	3	8	5	7
4	本を読むことは大切だと思います	思う	27	82	19	56	46	69
		思わない	4	12	14	41	18	27
5	いっしょに住んでいる人の中で本を読む人はいますか	いる	24	73	23	68	47	70
		いない	7	21	10	29	17	25
6	それはだれですか	父	14	42	12	35	26	39
		母	17	52	15	44	32	48
		兄	3	9	5	15	8	12
		姉	6	18	4	12	10	15
		祖父	1	3	2	6	3	4
		祖母	4	12	6	8	10	15
		その他	7	21	12	35	19	28
7	今までに絵本や物語を読んでもらったことがありますか	はい	29	88	28	82	57	85
		いいえ	2	6	4	12	6	9
8	どのくらい読んでもらったことがありますか	よく読んでもらった	11	33	9	26	20	30
		まあまあ読んでもらった	11	33	8	24	19	28
		あまり読んでもらわなかった	7	21	13	38	20	30
		全然読んでもらわなかった	2	6	1	3	3	4
9	一番読んでくれた人はだれですか	父	0	0	0	0	0	0
		母	19	58	11	32	30	45
		兄	0	0	0	0	0	0
		姉	1	3	1	3	2	3
		祖父	1	3	0	0	1	1
		祖母	2	6	1	3	3	4
		幼稚園・保育園の先生	9	27	13	38	22	33
		学校の先生	1	3	2	6	3	4
その他	0	0	7	21	7	10		
10	どこの本をよく読みますか	学校の図書館の本	15	45	22	65	37	55
		市立図書館の本	13	39	2	6	15	22
		家にある本	20	61	21	62	41	61
		その他	2	6	2	6	4	6

①

冊数	人数1組	%	人数2組	%	合計	%
0	9	27	8	24	17	27
1	3	9	1	3	4	9
2	5	15	3	9	8	15
3	8	24	4	12	12	24
4	1	3	1	3	2	3
5	2	6	5	15	7	6
6	1	3	3	9	4	3
7	0	0	1	3	1	0
8	0	0	1	3	1	0
9	1	3	1	3	2	3
10~	0	0	5	15	5	0

②

冊数	人数1組	%	人数2組	%	合計	%
0	3	9	3	9	6	9
1	7	21	4	12	11	16
2	1	3	3	9	4	6
3	3	9	6	18	9	13
4	5	15	3	9	8	12
5	4	12	1	3	5	7
6	2	6	3	9	5	7
7	3	9	0	0	3	4
8	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0
10~	2	6	10	29	12	18

表-3-2 平成15年度 読書アンケート 3月

		1組	%	2組	%	合計	%
1	「朝読書」を始めてから今までに何冊ぐらい本を読みましたか。 ※途中まで読んだ本も「1冊」と数える。	0～1冊	0	1	3	1	1
		2～4冊	5	10	29	15	22
		5～7冊	12	8	24	20	30
		8～冊	16	5	15	21	31
2	「朝読書」の時間についてどう思いますか。	あってよかった	22	11	32	33	49
		ないよりはあったほうがよい	5	4	12	9	13
		どちらでもいい	4	15	44	19	26
		つらい時間	0	2	6	2	3
		ないほうがよい	0	3	9	3	4
3	どんな種類の本を読んでいましたか	種類					
4	「朝読書」をするようになってから、読書の量はふえましたか。	もともとたくさん読んでいたため、変わらない	5	5	15	10	15
		とてもふえた	11	4	12	15	22
		少しはふえた	16	21	62	37	55
		もともと読んでいなかったし、変わらない	1	5	15	6	9
5	「朝読書」で読む本を「朝読書」の時間以外の学校にいる間にも読みますか。	よく読む	6	4	12	10	15
		時々読む	20	15	44	35	52
		読まない	7	15	44	22	33
6	いつ読みますか。	1組	休み時間 15 給食後 7 昼休み 2 放課後 2				
		2組	休み時間 9 給食後 2 昼休み 2 放課後 1				
7	朝読書をやっていて前よりよくなったと思うこと。	1組	読書量が増えた 11 読書が楽しくなった 6 読書が好きになった 5 本読みが早くなった 3 世界が広がった 3 生活を見直すようになった 1 ゲームが減った 1 漢字の知識が増えた 1 国語の成績が上がった 1				
		2組	読書量が増えた 2 読解力がついた 2 漢字が覚えられた 2 国語の点数がよくなった 1 本読みが早くなった 1 気分がいい 1 読書が好きになった				
8	学校から帰った後、家で読書をしますか。	ほとんど毎日する	6	4	12	10	15
		ときどきする	18	21	62	39	58
		ほとんどしない	4	5	15	9	13
		しない	4	5	15	9	13
9	あなたは読む本をどうやって選んでいますか。	家にある本から	21	23	68	44	66
		学校の図書館から	16	13	38	29	43
		学級にある本から	17	17	50	34	51
		友だちの本から	22	5	15	27	40
		その他	9	1	3	10	15
10	読書の良さはなんだと思いますか	1組	想像力がふくらむ 10 漢字が覚えられる 8 熱中できる 7 読解力がつく 7 物事を多方面から見られる 5 時間がつぶせる 2 リラックスできる 1				
		2組	読解力がつく 11 漢字の力がつく 5 楽しい 3 想像力がふくらむ 3				
11	今年度、6年生のみ「朝の読書」を行っています。来年度の進め方について意見を参考にさせてください。	全校で行うといい	32	22	65	54	81
		高学年でのみ行うといい	1	6	18	7	10
		中学年でのみ行うといい	0	2	6	2	3
		低学年でのみ行うといい	0	0	0	0	0
		行わない方がいい	0	6	18	6	9
12	あなたは現在、本を読むことが好きですか。	大変好き	17	11	32	28	42
		まあまあ好き	10	11	32	21	31
		それほど好きではない	3	11	32	14	21
		きらい	2	2	6	4	6

引用・参考文献資料一覧

- 毎日新聞社. (2003). 2003年度版 読書世論調査. 毎日新聞社.
- 毎日新聞社. (2004). 2004年度版 読書世論調査. 毎日新聞社.
- 教育家庭新聞社. (2003). 教育家庭新聞ニュース, 2003年8月30日号. 教育家庭新聞社.
- 齋藤 孝. (2002). 読書力. 岩波新書.
- 朝比奈大作. (2000). 読書と豊かな人間性. 放送大学教育振興会.
- 増田 信一. (1995). 読書教育通論 児童生徒の読書活動. 学芸図書.
- 国立教育政策研究所. (2002). 生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2000年調査国際報告書. ぎょうせい.
- 国立教育政策研究所. (2004). 評価の枠組み OECD生徒の学習到達度調査. ぎょうせい.
- 読売新聞社. (2004). 読売新聞社説, 12月8日付. 読売新聞社.
- 文部省. (1999). 小学校学習指導要領解説, 国語編. 文部省.
- 齋藤 孝. (2004). 齋藤孝のガツンと一発シリーズ4, 頭がよくなる必殺! 読書術. PHP研究所.
- 川島 隆太. (2003). 脳を育て, 夢をかなえる. くもん出版.
- 林 公. (2003). すぐできる朝の読書実践マニュアル [小学校編]. 小学館.
- 笹倉 剛. (2002). 心の扉を開く本との出会い. 北大路書房.
- 有元 秀文. (2002). 子どもの「読む力」を引き出す読書へのアニメーション. 学習研究社.
- 穴見 嘉秀. (2001). 「朝の読書」がもっと楽しくなるアイデア集. 学事出版.
- 中山 庸子. (2002). 自分をとり戻すための読書術 本と対話する生き方. 講談社+α新書.
- 中山 伸一. (2003). 情報メディアの活用と展開. 青弓社.
- 大塚 笑子. (2000). 朝の読書 希望への一步. メディアパル.
- 朝の読書推進協議会. (2001). 朝の読書46校の奇跡 ~私たちはこのように「朝の読書」に取り組んだ~. メディアパル.
- 岡山・落合中学校「朝の読書」推進班. (2001). 「朝の読書」が学校を変える. 高文研.
- 渡辺 康夫. (2000). やってみよう 読書のアニメーション. 全国学校図書館協議会.
- <http://www.j-sla.or.jp/oshirase/kekka1.html>
(過去35回分の5月1ヶ月間の平均読書冊数)
- <http://www.j-sla.or.jp/oshirase/kekka1.html>
(過去35回分の不読者の推移)
- http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm
(読解力における習熟度レベル別の生徒の割合)
- http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/001.htm
(子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画)
- <http://www.metro.tokyo.jp/INET/KEIKAKU/2003/03/70d3s101.htm>
(東京都子ども読書活動推進計画)
- <http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s17768/dokusyo-hp/dokusyo.htm>
(岐阜県子どもの読書活動推進計画)
- http://www.pref.gifu.jp/s11121/noukagaku/kawasima_kouenroku.htm
(川島隆太氏講演会)
- <http://www.geocities.co.jp/Bookend/5341/>
(朝の読書とは その理念)